

## 政権交代期の中国：胡錦濤時代の総括と習近平時代の展望

### 【研究概要】

2012年は「政権交代」の年である。中国も例外ではなく、同年秋に開催される第18回中国共産党全国代表大会において胡錦濤が総書記の座から退き、新たに習近平（現国家副主席）が中国の最高権力を手にすることになるとみられている。これと同時に、中国の最高意思決定機関である党中央政治局常務委員会の委員9人のうち、習近平、李克強を除く7人が入れ替わることになる。これによりいわゆる「第四世代」の時代は終わりをづけ、中国は文字通り新時代に突入することになる。

2001年のWTO加盟を追い風として、中国のGDPは胡錦濤政権発足時から約2.5倍に上昇し、経済規模で世界第2位の大国となった。2008年の金融危機からもいち早く立ち直り、アメリカを含む世界中の経済の対中依存度は急速に増大した。その経済力の強化は、軍事力や国際社会における発言力の強化に直結しており、特に周辺諸国にとり中国は安全保障上の脅威を十分に与える力を有している。これらのことは、習近平が胡錦濤より引き継ぐことになる中国の「国力」とその国際社会への影響力は、胡錦濤が江沢民より引き継いだものの比ではないということの意味している。同時に、習近平は増大した国力だけでなく、格差是正、インフレ抑制、経済構造転換、社会保障等、体制の安定性を左右しかねない多くの問題も引き継ぐことになる。習近平政権が増大した国力をいかに運用し、また一方で深刻さを増す諸問題にいかに対処していくかが、日本のみならず国際社会全体にとって急ぎ分析すべきテーマである。

習近平時代の中国政治、外交、経済、社会はいかなる展開をみせるのか。その展望を示し、日本の対中外交への政策提言を提示することが当研究プロジェクトの目的である。

表層を追って結論を急ぐのではなく、地に足のついた議論を積み重ねるため、当プロジェクトでは、「胡錦濤時代」の十分な検証を踏まえた上で「習近平時代」を展望するという手法をとる。そうした視座に立つのは、以下の2つの意図からである。

第一に、「将来」を展望するためには、「現在」を「過去」から連なる歴史の流れの中に位置付けておく必要がある。

第二に、毛沢東時代から胡錦濤時代、習近平時代へと移る歴史の変遷の中で、トップリーダーの「アイディア」が果たす役割は顕著に縮小する傾向にある。言い換えれば、現在の中国の政策は、国際環境や国内の社会経済情勢の従属変数としての側面が大きくなっていくということである。このことは、胡錦濤政権が直面した様々な国際的、国内的課題は、習近平政権の政策形成にも決定的な影響を及ぼすことになるということを示唆している。

当研究会の研究課題は下記のとおりである。

- ・胡錦濤時代に、中国の国内外の状況はいかに変化したのか（しなかったのか）？

- ・ 胡錦濤政権は、そうした変化の中でいかなる課題に直面し、それに対しいかに対処し、それはいかなる結果を招いたのか？
- ・ そうした諸課題は習近平政権にいかなる形で引き継がれることになるのか？また、習近平が直面することになる新たな課題とは何か？
- ・ 各政策課題に対する習近平政権下の政策はいかなるものになると予測されるか？

この 4 つの課題は、 持続的経済成長の展望 エネルギー需要の増大と対策 社会変容と党の適応能力 「三農問題」とガバナビリティ 中国のアジア・太平洋戦略 グローバル・ガバナンスと中国 軍の近代化と周辺地域への影響というテーマごとにそれぞれ分析される。

これらのテーマを検討することで胡錦濤時代を総括し、そこから得られた知見に基づいて習近平時代の中国の行動を展望することを通じて、日本の対中外交への政策提言を行うことがこの研究プロジェクトの最終的な目的である。

#### 【研究プロジェクトメンバー】

##### 主査

高木誠一郎 （日本国際問題研究所研究顧問）

##### 委員

太田宏 （早稲田大学教授）

大橋英夫 （専修大学教授）

菱田雅晴 （法政大学教授）

増田雅之 （防衛研究所主任研究官）

毛利亜樹 （同志社大学助教）

渡辺紫乃 （埼玉大学准教授）

##### 委員兼幹事

浅利秀樹 （日本国際問題研究所副所長）

角崎信也 （日本国際問題研究所研究員）